

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19401040

研究課題名 (和文) 極北先住民の生存・共生システムとしてのトナカイ牧畜文化の研究

研究課題名 (英文) Research on the Reindeer Herding Culture as a subsistence and symbiotic system for the Indigenous Peoples of the Far North

研究代表者

吉田 睦 (YOSHIDA ATSUSHI)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：00312926

研究成果の概要 (和文)：

ロシアの極北地域におけるトナカイ牧畜文化は、ソ連邦崩壊後、集団化企業体制の崩壊するなかで地域的民族的な特質を示しつつ変容した。当該文化の担い手は少数先住民族であり、そのうち西シベリアのネネツ人と東シベリア (サハ共和国) のエヴェン人における実態を、経済・社会構造の変化、環境変化への適応と文化的再構築という現象的側面から現地調査した。その結果、当該文化が、諸局面に柔軟に対応する民族文化の重要な一要素として機能していることが確認できた。

研究成果の概要 (英文)：

Reindeer Herding Culture in the Far Northern Regions of Russia, after the breakup of Soviet Union has changed with the variation inside each regions and ethnic cultures. The Carriers of this Culture are the Small numbered indigenous peoples of the North. We, the project researchers, have accomplished the participant observation from the aspect of the economical and social structure changes, environmental changes, and cultural reconstruction. The main result is that the Reindeer herding Culture functions well as one of ethnic cultures which adapts resiliently in the various phenomena.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	4,900,000	1,470,000	6,370,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：ロシア、極北、トナカイ牧畜、少数先住民族、文化、ネネツ、エヴェン

1. 研究開始当初の背景

ロシアの極北部を居住範囲とする少数先住民族の間で、トナカイ牧畜は依然として生存生業として機能し、また同時に民族文化の一要素としての意義を持ち続けてきた。21世紀に入った現在、トナカイ牧畜は政治経済・社会変化、資源開発、環境・気候変動といった諸要因の影響を受け、存続の危機に瀕しているところも多いが、逆に家族経営による牧畜を興隆させているところ（西シベリアのツンドラ・ネネツ人）もある。

当初の予定では、ネネツ人のうち、ツンドラ地帯とタイガ（北方針葉樹林）地帯においてそれぞれ家族得経営を主要経営形態とするトナカイ牧畜を展開してきた二つのグループ（ギダン・グループと森林ネネツ）の実態を現地調査により調査、分析することを主眼に置いた。

2. 研究の目的

ソ連期には、農業集団化政策の一環として農業経済の一経営部門として再編されていたかのようにみえたトナカイ牧畜・飼育であった。他方で、この部門の実質的担い手である少数先住民族の生業として、また民族文化の一要素として重要な意義を有してきたことには応分の注意が払われてこなかった。このような背景を考慮し、ソ連期に重要視された国家的コンテクストの経済性より、地域経済や当該民族の生存生業として、またエスニシティの源泉としてのトナカイ牧畜文化の現状を、牧畜管理技術と地域経済性を中心に継続調査・分析することを主要目的とした。

3. 研究の方法

(1) トナカイ牧畜従事者のもとでの現地調査による参与観察法。

(2) 中央及び現地関係機関（行政当局、農業局、先住民局、先住民関連NGO、トナカイ牧畜者連盟、農業企業等）における聞き取り及び資料収集。

(3) 学会・研究会での報告及びそこでの本邦・ロシアその他の海外の人類学者・専門家との議論・意見交換・分析。

(4) 過去のネネツ人を中心とする現地調査データとの比較対照、その他の統計データ等の分析、映像資料（動画、静止画）の活用と分析。

4. 研究成果

(1) 総括 当初予定のツンドラ・ネネツ人と森林ネネツ人とのトナカイ牧畜文化の比較を諸事情により変更し、森林ネネツ人とサハ共和国のエヴェン人によるトナカイ牧畜文化における調査を実施した。結果的にはあるが、この調査地変更により、これまでのツンドラ・ネネツにおける調査結果をも踏まえ

て、より多角的な視点での分析が可能になった。

この両地域は、図1.に示す通り、ロシアの家畜トナカイ頭数全体が減少する中で、頭数の推移傾向と個人/企業経営比率において対照的な状況を示す地域であり、比較研究するに値する諸条件を有している。

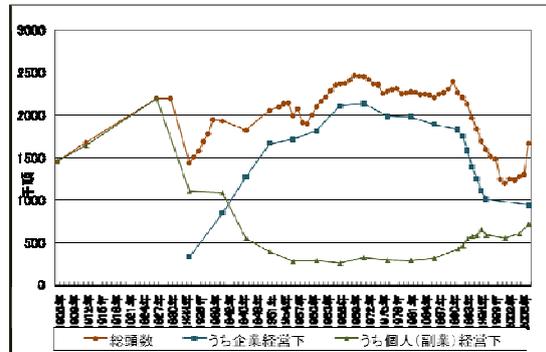


図1. ロシア(ソ連)における家畜トナカイの頭数変動(1906-2006)*

図1.に関して言えば、ソ連崩壊後の家畜トナカイ頭数の激減(最盛期の約半数)と近年の回復傾向がみられる。その中で1990年以降の個人経営下のトナカイ比の上昇も注意をひく。

(2) 森林ネネツ人地域調査

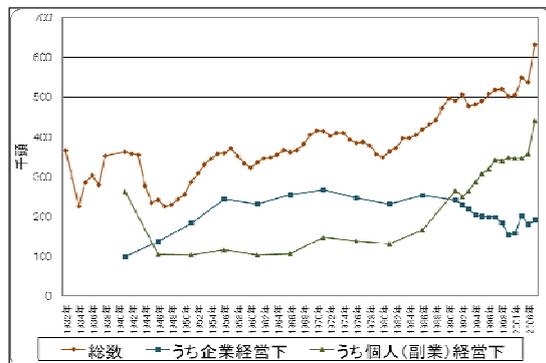


図2. ヤマル・ネネツ自治管区における家畜トナカイ頭数の変遷(1932-2007)*

図2において明らかであるように、森林ネネツ人の多くが居住登録するヤマル・ネネツ自治管区においては、家畜トナカイ頭数は常に増加傾向を示してきた(但し増加分は森林ネネツ人ではなくツンドラ・ネネツ人のトナカイである)。また、ソ連崩壊後の個人経営(家族経営)下の家畜トナカイ比の上昇が顕著で、現在は70%以上を占めている。

吉田と高倉及び現地協力者による森林ネネツにおける2008年2-3月の調査では、半遊動キャンプと集落に2週間滞在し、トナカイ牧畜の集群活動、生存生業としての漁撈活

動等を記録した。(吉田; DVD 資料)

また地域経済における先住民企業体(オブシーナ:obshchina)の意義づけや開発行為の中での先住民族の生活実態についても明らかにできた。(吉田 2009b; 高倉 2010c)

オブシーナは、ロシアにおける北方先住民族の文化維持・復興と経済的支援の一環として推進されている民族生業文化振興策であるが、その各地における実態は体系的には調査されてきていないのが現状である。調査時点(2008.3)においてヤマル・ネネツ自治管区には66、うち調査地のプール地区には6のオブシーナが登録されている。オブシーナの内容や規模には、トナカイを2万頭保有するものから、構成員数名で僅かな野生植物の採捕等に従事するものまで相当なばらつきがある。調査地のオブシーナは構成員87名であるが、家畜トナカイを少数保有しつつも、漁撈資源の販売が主体、毛皮獣販売が補助的な資金源である。そのなかでのトナカイ牧畜は、たとえばツンドラ・ネネツ人の家族経営のそれとは異なり、恒常的に保有トナカイの全数の集群を繰り返すことがなく、橇牽引等の使用頻度の高い特定群を宿营地周辺において管理・集群するというものである。タイガ(北方針葉樹林)地帯という植生空間も家畜放牧という点でツンドラ地帯とは異なる意味合いを持つ(視界がきかず、集群しにくい一方で、群が遠方に散逸しにくい)。

また、森林ネネツの間では、移動手段としてスノーモービルが普及し、トナカイを移動手段とする機会はツンドラ・ネネツ人に比して相当に低いのが現状となっている。それは、トナカイの毛皮を使用する衣服や住居の被覆の使用割合がかなり低い点にも端的に表れている。とはいえ、トナカイは森林ネネツ人、特に半遊動生活を送る者にとっては民族アイデンティティの中心であって、年に一度中心集落で開催されるトナカイ牧民の祭典では、トナカイ橇レースが華である。また家族ファッションショーは、トナカイ毛皮をふんだんに使用して装飾を施した自製の冬用外套の着比べである(調査中に当該祭典が開催された)。

さらに、ツンドラ・ネネツ人のトナカイ牧畜を主体とする周年遊動による生業形態とは対照的な、半遊動による森林ネネツの集落-キャンプ関係の緊密性等も確認できた。この点については高倉が、森林ネネツの調査地の事例において、定住-遊動の関係を、従来の対立的なものではなく、宿营地-生産領域と社会的関係(父系氏族と外婚制)を核として、定住と遊動の両極の中間的な位置において展開されうるものとしている。高倉はこのために「遊牧定住連続体」という概念を提唱して、今後の議論の展開を想定している。(高倉 2010c)

(3) サハ共和国エヴェン人地域調査

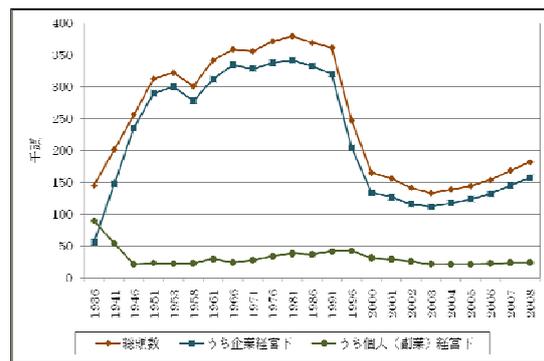


図 3. サハ共和国における家畜トナカイの頭数変遷(1936-2008)*

吉田は、西シベリアのトナカイ牧畜継続地としては同質性を有しながらも、生態的条件や地域的条件、さらに民族文化系統の相違点から一定の比較対象としての差異がみられると思われるサハ共和国内のエヴェン人を主体とするトナカイ牧畜の調査を、2009年7-8月に実施した。具体的には、サハ共和国コビヤイ地区のヴェルホヤンスク山脈中に位置するエヴェン人の集落(セビヤン・キュエリ村)及び国営企業のとナカイ牧畜キャンプにおいて現地調査を行った。

当該国営企業は、他経営体への種オス・メストナカイの生体販売に特化する企業で、ソ連期より優良企業とされてきたが、他の多くの国営企業がそうであるように赤字企業でもある。その一労働班(ブリガーダ)のキャンプにおける現地調査では、夏季の郡管理技術を中心に映像記録し(吉田; DVD 資料)、参与観察を行った。国営企業とはいえ、トナカイ群管理をはじめとする牧畜・飼育に係る事象全般にわたり、エヴェン人の民族牧畜文化に大きく依拠していることが確認された。

さらに本調査において、調査地のトナカイ牧畜の文化的、牧畜管理的視点からの特徴点として以下の諸点が確認された:

- i) エヴェン種のトナカイの保存・繁殖活動が維持されている
- ii) 当該国営企業の放牧地は、基本的には荒廃地が少なく、トナカイ可養量(carrying capacity)は維持されている。しかし部分的には荒廃地がある(エンディバル銀鉱山試掘地; 地球環境変化とつながる可能性のある頻発する河川氾濫による牧地流失)
- iii) 当該企業の主要活動(種トナカイ育成・販売)の他にも、袋角販売や加工企業へのトナカイ肉売却の方途を探求中である。しかし僻地故に輸送コストがかさみ、輸送手段も局限されている。
- iv) 山岳タイガ地域故のトナカイの非生産

的損失（疾病・負傷・害獣・散逸によるロス）の比率が高い。
（Ёсида（吉田）2010；印刷中）

(4) トナカイ牧畜の牧畜文化における位置づけ

2009年5月、研究分担者の高倉がフィンランド、ラップランド大学研究員と共に東北大学東北アジア研究センターにおいて、日本とフィンランドの南北半球の牧畜研究者による国際セミナーを開催した（東北大学東北アジア研究センター・ラップランド大学極北センター共催）、代表者吉田が参加した。

同セミナーにおいては、牧畜文化の中でも人-動物関係の相互性・親和性と生業複合にポイントが置かれた。特に極北地域に展開されるトナカイ牧畜が、その地域性、トナカイの牧畜対象家畜としての特殊性故に、グローバルな牧畜文化のコンテキストでの議論が体系的に行われてこなかったことを考慮し、上記のポイントを切り口として、牧畜民文化・社会全般の議論の俎上に乗せる試みであった。

その中で高倉は極北トナカイ牧畜のこれまでの調査実績をもとに、乾燥地域の牧畜特性（多種家畜混合型）と極北トナカイ牧畜（単一種型）をそれぞれ環境と社会的諸関係に適應して成立した生業複合連続体という共通概念での理解を提起した。

（H. Takakura, 2010b）

吉田はネネツ人のトナカイ牧畜の実態調査に基づき、個体認識と親和性との観点から、人-家畜関係の多様性や社会的状況との関連性を論じた。（A. Yoshida, 2009/5/17）

このように、本セミナーは、極北型牧畜としてのトナカイ牧畜に関し、人-家畜関係と生業複合を中心として今後、より開かれた議論に発展させる重要な契機を提供した。

(5) トナカイ牧畜の現状

① 全般的状況

2009年の年初の段階で、ロシア連邦の家畜トナカイ頭数は150万頭程度である（トナカイ牧畜民連盟による）。この数値は、ソ連期の最高値250万頭からみれば依然として低レベルであるが、ペレストロイカ期前後の落ち込みから回復途上にある2,002-2,003年の120万頭台という数値からみれば、さらに回復傾向にあるといえる。もっともこれが実数によるものか、統計上のもの（申告漏れ、計算漏れの減少等）かは不明である。

その中でロシアの家畜トナカイ総数の7割を占めるヤマル・ネネツ自治管区の地位は当面不動であるとみられる。その中で森林ネネツ人の先住民企業体メンバーによるトナカイ牧畜は、当該自治管区においては小規模かつタイガ型の副次的・零細経営のものとして位置

づけられる。そこでは、漁撈行為その他の生業活動や生活全般において民族/在来知に依拠した生活が展開されている。

他方サハ共和国のエヴェン人のトナカイ牧畜は、補助金の支払われている国営の優良企業の枠組みで実施されている点では、ヤマル・ネネツ自治管区の調査地の例とは状況が異なる。とはいえ、当該企業の11ある労働班（ブリガダ）は、いくつかのエヴェン人家族単位が集まって生産単位を構成しており、牧畜管理技術その他のノウハウは民族文化・民族/在来知に依拠するところが大きいことが確認できた。

② ツンドラ/タイガのトナカイ牧畜比較

ツンドラとタイガ（北方針葉樹林帯）における植生、地勢（ランドシャフト）等の諸条件の相違は、必然的に牧畜管理・経営に影響を与えている。

例えば視界の相違という点は、群管理行為に決定的影響を与える。まず、ツンドラでは人の側からの群管理が容易である。家畜側からみると、害獣を早期に発見可能である。他方、視界を遮る森林の展開するタイガや山岳地域では、人の側からは家畜の居場所の把握が困難であるが、家畜側には安寧の地を提供してくれる。しかし害獣が潜み、食害を受ける確率が高い。また鋭利な礫岩の多い山岳では負傷の頻度が高い。

サハのエヴェン人主体の国営企業においては、山岳タイガにおける特徴を有するトナカイ牧畜が維持・展開されていることが観察された。同時にそのような条件下での経営努力が行われ続けてきたことは、地域（共和国）経済性という視点から、今後とも注意を払うべきことが認識された。

そもそもツンドラとタイガ、それぞれの植生帯のトナカイ牧畜における群管理には一長一短がある。ツンドラ（ツンドラ・ネネツ人）、タイガ（森林ネネツ人、エヴェン人）のそれぞれの植生帯におけるトナカイ牧畜文化は、植生・地勢（ランドシャフト）により規定された側面が多く、経営戦略上もその点に少なからず条件づけられることを確認した。同時に、そのような諸条件下において、それぞれの民族は独自の柔軟性を示しつつ、新規のトナカイ牧畜文化を再構築していく過程を見出すこともできた。

3年間の研究期間で、ロシア極北におけるトナカイ牧畜文化について、以上に示す2か所の現地調査を通じて、当初予定していた現状調査目標の大半は把握・分析することができた。ビデオ映像を中心に、今後牧畜管理技術を中心にまだ分析すべき資料も蓄積している。今後はこれらの分析作業を継続していきたい。また、当該調査はさらに長期に、かつ他の地域の状況をも調査することにより、

極北トナカイ牧畜の文化的状況を明らかにできるものである。そのための調査を今後計画立案していきたい。

*図 1-3: 公的関係諸機関のデータをもとに作成

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

1. 高倉浩樹, 生活様式としての遊動定住連続本定住化政策後の森林ネネツにおける社会組織と居住、東北アジア研究、査読有、14巻、2010c、147-187.

2. F. Stammer, H. Takakura, Introduction: Living with animals as the socially significant other in pastoralism, Northern Asian Study Series, 査読有, vol. 11, 2010a. 査読有、1-18.

3. H. Takakura, Arctic pastoralism in a subsistence continuum: A strategy for differentiating familiarity with animals, Northern Asian Study Series, 査読有, vol. 11. 2010b, 21-42.

4. 吉田睦, 森林ネネツ (ロシア・西シベリア) のトナカイ牧畜-先行研究概説-, ユーラシア言語文化論集、査読無、11 巻、2009a、1-20.

[学会発表] (計 4 件)

1. 高倉浩樹, 衛星画像データ利用によるレナ川中流域社会の分析方法試論、総合地球環境学研究所シベリアプロジェクト全体会合、2009/12/6 総合地球環境学研究所

2. 吉田睦, サハ共和国コピヤイ地区におけるトナカイ・エヴェンの生活と環境-トナカイ牧畜と環境利用・認識-, 総合地球環境学研究所シベリアプロジェクト全体会合、2009/12/6 総合地球環境学研究所

3. H. Takakura, A strategy for differentiating the tameness of animals: A consideration against the exceptionalism of arctic pastoralism, Social significance of animals in nomadic pastoral societies of the Arctic, Asia and Africa [東北大学・東北アジア研究センター・ラップランド大学極北センター共催日本-フィンランド国際セミナー], 2009/5/16、東北大学・東北アジア研究センター

4. A. Yoshida, Private reindeer herding among the Tundra Nenets in West Siberia: The practice of "ethnic" herding, Social significance of animals in nomadic pastoral societies of the Arctic, Asia and Africa [東北大学・東北アジア研究センター・ラップランド大学極北センター共催日本-フィンランド国際セミナー], 2009/5/17、東北大学・東北アジア研究センター

[図書] (計 7 件)

1. A. Ёсида, Оленеводство ламынхинской группы энцев при современных условиях - Село Себян-Кюель и ГУП «Себян»-, E. Пивнева (ред.) «Историко-культурное наследие народов Севера» 2010 (в печати) [訳: 吉田睦, 現代的条件下におけるラムインヒンググループ・エヴェンのトナカイ牧畜-セビャンキュエリ村と国営企業「セビャン」、E. ピヴネヴァ (編)、北方諸民族の歴史的文化的遺産、2010 (印刷中)]

2. 高倉浩樹, 先住民族と人類学-国際社会と日常実践の間における承認をめぐる闘争、世界思想社、窪田幸子、野林厚志 (編)『先住民とはだれか?』、2009c、38-60.

3. 吉田睦, 明石書店、ロシア・西シベリアにおける石油・天然ガス開発とトナカイ牧畜民、岸上伸啓 (編)『みんぱく実践人類学シリーズ7 開発と先住民』、2009b、第2章35-60

4. 吉田睦, 朝倉書店、3. 4 石油・天然ガス開発とツンドラの荒廃、立川武蔵、安田嘉憲 (監修)『朝倉世界地理講座-大地と人間の物語-』2)『東北アジア』2009c、99-108.

5. 吉田睦, 4. 1 帝政期ロシアのシベリア統治、立川武蔵、安田嘉憲 (監修)『朝倉世界地理講座-大地と人間の物語-』2)『東北アジア』2009d、119-129

6. 高倉浩樹, 9. 3 シベリアの狩猟・牧畜をめぐる歴史と現代ロシア、立川武蔵、安田嘉憲 (監修)『朝倉世界地理講座-大地と人間の物語-』2)『東北アジア』2009a、301-313

7. 高倉浩樹, 10. 2 エスニック・マイノリティの覚醒、伝統文化への傾斜-社会主義・多民族主義・国民国家をめぐる-、立川武蔵、安田嘉憲 (監修)『朝倉世界地理講座-大地と人間の物語-』2)『東北アジア』2009b、344-354

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 睦 (YOSHIDA ATSUSHI)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号: 00312926

(2) 研究分担者

高倉 浩樹 (TAKAKURA HIROKI)

東北大学・東北アジア研究センター・准教授

研究者番号: 00305400

(3) 連携研究者

()

研究者番号: